

英語COMIにおけるサマリーの実践

—単なる穴埋め活動からの脱却—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科
八宮 孝夫

英語COMIにおけるサマリーの実践

—単なる穴埋め活動からの脱却—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科
八宮 孝夫

要約

今年度から新高等学校学習指導要領が導入され、英語科でも *receptive* な活動から *productive* な活動に重点が置かれ、検定教科書もその領域での言語活動により紙面が割かれている。その活動の1つに本文のサマリー・ライティングがある。これは本文から *receive* した内容を自分のことばで *produce* するという意味で、両者の統合的な活動といえる。にもかかわらず、出版された改訂教科書では、2、3の例を除き、従来どおり既に要約済みの英文にいくつかの空所のあるパッセージが用意され、その空所を完成することでサマリー・ライティングとしているものが圧倒的に多い。これでは、あくまで本文理解の確認はできても、英文要約の力をつける活動とはならない。本稿は、その欠点を補うべく、真の意味で効果的なサマリー・ライティングを模索した試みである。

キーワード：談話構造の基本、旧情報、新情報、穴埋めタイプのサマリー、バランスの取れた要約、自分の表現

1 はじめに

『新高等学校学習指導要領（外国語編）』では、従来の4技能から、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと【やりとり】」、「話すこと【発表】」、「書くこと」の5領域となり、話す活動がより細分化され、本文の解釈という *receptive* な活動から、その本文について意見を述べたり、やり取りをする *productive* な活動により重点が置かれるようになった。検定教科書も、その方面での活動が増えている。しかし、サマリー・ライティングに関して言えば、相変わらず、既にサマリーされたものの空所に適語を入れる形式が圧倒的である（馬場 2022 による）。それも、補う語が選択肢として用意されている場合も多く、こうなると *productive* な活動とは全くいえない。実際のサマリー活動は、本文の内容理解という *receptive* な面と、それを自分のことばで表現するという *productive* な面を持つ統合的な活動で、新指導要領の理念から言っても、もっと推進されるべきものである。本稿は、本来のサマリー・ライティングはどうあるべきものかについて、実践を交えて提案する（2022年度、語学教育研究所・研究大会における発表に加筆したものである）。

2 「サマリー・ライティング」とは

「サマリー」は、一まとまりの文章を読んだ後に行う活動で、通常本文を学習した後のまとめとして行われるものである。学習した内容を、核になる要素を含みながら要約する活動は、単に一文内の文法や構文能力だけでなく、文と文のつながり、内容構成などまさに談話的能力が問われるものである。非常にチャレンジングであるが、それだけに高校英語で段階的に習得させたいスキルである。

ただ、一つの正解があるわけではなく、サマリーの分量にしても、その条件次第で変わってくるであろう。それ故に、多くの教科書では、ほぼサマリーのペースを掲載して、いくつかの空所を完成する形式をとってサマリーに代える、というのが実情である。しかしサマリーは上で述べたとおり、単なる文法力を超えた構成力、談話文法的能力が必要で、これを養うには、やはり実際にサマリーを書いてみることにしか方法はないであろう。

そのためには、まずサマリーの元となる本文がしっかりとした構成のものでなくてはならない。ここでは、本校で使用している教科書のある課を例に、以下の手順で進める：

1. まずサマリーを書かせる対象である教材本文を検討する（本文で不十分な点は何か）。
2. 背景知識をオンラインの動画で補いながら、本文に入っていく実践例を2つ紹介する。
(使用した動画のスク립トを提示)
3. まとめの活動としてのサマリーの手順を説明する。
4. 実際に生徒の書いたサマリーの傾向を述べ、問題点や工夫点を検討する。

3 教材本文の検討と背景知識の導入

使用教材は以下のとおり：

Crown English Communication I(三省堂)

Lesson 5 Roots & Shoots

1960年代に、女性という不利な立場でチンパンジー研究の先駆的な働きをし、のちに自然保護活動にも力を入れた Jane Goodall のインタビューである。

3.1 Part 1 のインタビュー

Jane Goodall is famous not only for her work with chimpanzees but also for her effort to conserve nature. Here, Ken interviews her about her life and work.

Ken: Dr. Goodall, thank you for taking time for this interview. I know that you spent many years studying chimpanzees in Africa. When did you first decide to go to Africa?

Jane: It was after I have read the Doctor Dolittle and the Tarzan books. When I was 11, I knew that somehow I would go to Africa to live with animals, study them, and write books about them.

Ken: I'm sure there are lots of young people who want to work with animals someday. How can they prepare themselves?

Jane: There are a lot of things you can do in order to understand animals. It is very important that you watch them and observe their behavior. It is also important that you write notes and ask questions. If you are really determined, you'll have to work really hard. Take advantage of every opportunity, and don't give up.

(Doctor Dolittle と Tarzan については Part1 の右ページ下に日本語による内容の解説がある。『ドリトル先生』は読んだことのある生徒もいるだろうが、音

声のみで「ドゥーリトォ」と聞こえてもピンと来ないかもしれない。また、本文には出てこないが、彼女が滞在していたタンザニアと調査地域であったゴンベ渓流国立公園を含んだ地図も提示されている。彼女がチンパンジーを観察している写真もある)

一見何も問題なさそうであるが、アフリカでのチンパンジー研究の動機を聞かれて、『ドリトル先生』や『ターザン』を読んだことがきっかけ、と答えているが、そこからアフリカ行きまでにはいろいろな経緯があったはずで、Ken は “What did you actually do in order to realize your dream?” というような質問をすべきであった。しかし、Ken は同じような夢がある子供達に対してのアドバイスを Jane Goodall に求めており、彼女は観察やメモを取ることの大切さ、そして「機会があればそれを最大限に活かし、また決して諦めることのないように」と答える。このアドバイス自体非の打ち所のないものであるが、Jane Goodall がそれまでにしてきた苦勞や体験談が一切インタビューで出てこないために、それを裏付ける根拠に欠け、このアドバイスが胸にスッと響かない。

この不備を補うための背景知識の導入を行った。

3.2 Part1 背景知識導入のためのオンライン動画

Part 1 への橋渡しとして彼女の情報がもう少し必要と考え、ネット上の動画 [Jane Goodall - Animal Rights Activist | Mini Bio | BIO - YouTube](#) を活用。授業ではアフリカで研究をすることになるまでの1分半ほどを視聴した。また、かなりのスピードであるので、リスニングで要点を確認した後、スク립トを配布、文字によっても確認した。

スク립トは以下のとおり：

Jane Goodall: researcher of chimpanzees (Mini Bio)

Jane Goodall was interested in outdoors since childhood. But it was one toy she received as a toddler that would send her on her life's path - a stuffed animal, a chimp, named Jubilee. 1Valerie Jane Morris Goodall was born on April 3rd, 1934 in London, England.

While staying on a farm at age four, 2she hid for hours in a hen house just to see how hens lay eggs while her worried family called the police to report her missing.

3It was after reading the story of Dr. Dolittle at age eight when she knew she just had to get to

Africa.

At age twelve, she founded her own nature club, alligator societies. Members *were required to identify ten dogs, ten trees and ten birds and five butterflies or moths.

4In May 1956 a friend invited her to visit her family farm in Kenya. Jane waitressed to earn her *round-trip boat fare. She arrived in Africa in April 1957. While there, she met a famed *anthropologist Louis Leakey. 5He hired Jane as his secretary, and set her up to study chimpanzees in Tanzania.

In 1960 Jane arrived in *Gombe Stream Chimpanzee Reserve in Western Tanzania, with her mother as *chaperone.

(*印は注釈をつけた単語)

下線部はリスニング・ポイントの部分で、1 は生誕の地や年、2 は好奇心を示すエピソード、3 はアフリカに興味を持ったきっかけ（これは本文でも言及）、4 は更にアフリカに行くきっかけ、5 はチンパンジー研究のきっかけの部分である。

内容的には重複するが、彼女の生の声を聴かせたくて、以下の動画も視聴させた：[Jane Goodall: Lecture at Berkley ジェーン・グドールがバークレー校で講演 \(フルイベント\) - YouTube](#) (全体は 40 分の長さであるが、ここは 2:30-6:50 の部分)。要点は以下の部分である：

1And when I was ten years old, I always saved up my little bits of pocket money and I would spend time in the second-hand book shop and I found a book of this size – I just had enough money to buy it: It was called “The Tarzan of the Apes”. You all know Tarzan, right? You know Tarzan from the movies and TV? But this was from the book.

When I read that book when I was 10 years old, I decided, “I know what I want to do when I grow up: 2I’m going to go to Africa, I’m going to live with animals and I’m going to write books about them. That was my dream and everybody laughed at me. How would I get to Africa? There was a war raging. We didn’t have any money. There were no planes going back and forth. And I was just a girl. And back then in England girls didn’t have those opportunities. 3So everybody laughed at me, saying, “Jane, why don’t you get real. Why don’t you

dream about something you can achieve? Forget this nonsense about Africa,” except my mother. 4And she said to me, “Jane, if you really want something, you’re going to have to work very hard, you’re going to have to take advantage of opportunity and never give up.” (中略)

So did I go straight from school out to Africa to study chimps? No. I couldn’t go to university because we didn’t have enough money, but I got a job in London as a secretary and saved up my money and saved up my money, and I got a letter from my school friend inviting me to Kenya, and I still didn’t have nearly enough money, so I went home where I didn’t have to pay rent, and 5I worked as a waitress – it was jolly hard work about 4 months, serving people’s breakfast, lunch, and dinner. Eventually, I had enough money saved up for a return fare to Africa by boat, and then, I got there, stayed with my friend, heard about Louis Leakey

1 は『ターザン』を古本屋で見つけたときのエピソード、2、3、4 は Jane Goodall が少女時代に夢を語った時の周囲の反応、それに対する母親の励ましで、この部分こそ、本文で若者たちに対するアドバイスとして述べられているところである。5 はアフリカ行きまでの苦労した体験で本文に欠けている部分である。この講演では、本文とは違って、自分の苦労した体験や母親からの励ましなどを踏まえて聴衆にアドバイスしていることがわかり、その根拠が示されていることで、深く胸に響くのである。言い換えれば、談話構造的に見て、「自己の体験談（旧情報）→それに基づいた主張（新情報）」という流れが自然である、ということである。

3.3 Part3 背景知識導入のためのオンライン動画

教科書本文の Part2 ではヒトとチンパンジーとの類似点、とりわけチンパンジーも人間同様、ここに異なる感情や性格を持っていることが示される。ところが、Part3 になると、動物の生息地息の環境が脅かされていることに対する、Jane Goodall の取組み、講演活動へと話題が移っている。チンパンジー研究者から自然保護活動家に移行した経緯が説明されず、Part2 と Part3 の間には内容的にギャップが感じられる。そこで、そのギャップを埋めるために、以下の動画を用いて補足をした。[Jane Goodall - Finding our](#)

way to a better future - YouTube

以下、スクリプト：(1:20-2:47 の部分)

Jane Goodall ~Video from “Finding our way to a better world”

I began the chimp work in 1960 and then in 1986, by that time there were seven different field sites, where different scientists were studying chimps across Africa. When I began it was just me. So I helped to organise a conference in the US to bring these seven scientists in the seven field study sites. And 1the idea was to discuss how chimp behavior was the same or perhaps different in the different *environments. At the same time as these discussions on behavior, 2there was a session on *conservation and a session on conditions in some captive situations, and in both cases, it was utterly shocking.

3In Africa, chimpanzee habitats were being destroyed, chimpanzee numbers were declining, and so I went to the conference as a scientist and 4I left as an *activist. 5The biggest difference between us and chimpanzees and other animals is an explosive development of our intellect. And it doesn't make any sense if you think we're the most intellectual creature on the planet that we're destroying, our only home. I truly believe we have a window of time, which is all the time closing – if we get together during that window of time, we can start to *heal some of harm we've inflicted or at least slow down the climate crisis. (*印は注釈をつけた単語)

下線部はリスニング・ポイントの解答を含む部分で、1 により、様々な地域のチンパンジー研究者が集い、異なる環境でのチンパンジーの比較研究をする会議を開催したこと、2、3 でその会議でチンパンジーの生息地域の環境破壊が進み、生息数も激減していることを知り、自然保護活動家になったことが述べられている。この背景を知ること、初めて Part3 へのスムーズな移行が可能となる。

3.2、3.3 は、サマリーとは直接関係ないように見えるかもしれないが、サマリーの対象となる元の英文を談話的に見て自然な流れとして理解させなければ、その後を書くサマリーも自然な文章の流れにならないであろう。とりわけ、教科書の本文は、既出の文法や語彙数、ページ数など様々な制約があるために、原文を

割愛したり簡略化したりしている場合が多い。すると、内容的に優れた Jane Goodall のような教材でも、ところどころ不自然な流れになっている箇所が見受けられる。そのあたりを補うような指導をしなければ、それに続くサマリー・ライティングにも支障をきたすのである。

4 まとめ活動としてのサマリー

4.1 「サマリー」の2タイプ

いよいよ、本稿のテーマである「サマリー・ライティング」であるが、「サマリー」には2つのタイプがあると思われる。

- ① 本文の表現を用いながら、その内容の要約をするもの

本文のキーワードや新出語で学習者に覚えてほしいような重要語をブランクにしておき、話の流れ、文脈によってその部分が補えるかの力を見るものである。多くの教科書の場合、穴埋めサマリーになっているものはこの形式になっている。

- ② 本文の表現からは離れて自分の言葉で要約するもの

本来的な意味でのサマリーである。

Swales et al. (2004) では以下のように述べている：

1 It should offer a *balanced* coverage of the original. (There is a tendency to devote more coverage to the earlier parts of the source text.)

2 It should present the source material in a *neutral* fashion.

3 It should *condense* the source material and be presented in the summary writer's *own* words. (Summaries that consist of directly copied portions of the original rarely succeed.)

まず、元の文章の内容をバランスよくカバーすること、2 つ目は中立的な立場でまとめること、最後にサマリーをまとめる人自身の言葉でまとめること、という3点である。ここでも、自分の言葉で要約することの大切さが説かれている。結局、本文の表現を用いると、ある一かたまりそのままを引用することになり、“condense”という概念とは相容れなくなるからであろう。

4.2 サマリー・ライティングの手順

今回は、上記②のサマリーを目指して、学習者に書かせることを試みた。そのため、教科書 P86 の Wrap It Up! という内容のまとめコーナーの以下のステップ

を踏んだ：

1 ㊤ Review the text and fill in the blanks というパートごとに項目形式でまとめる穴埋め活動で、各 Part の要点を思い出させる。

例 Similarities between chimps and humans (Part2 の内容)

- Share 98.6% of ()
- Brains and behavior
- Family members are ()
- Emotions: sad, happy, afraid, angry
- Character: friendly, loving, caring, cruel

2 ㊤ What would Dr. Goodall say? What would she not say? と言って、彼女が主張している内容を選択する活動（主張が英文で提示されている）を行い、彼女の主張を思い出させる。

例 1. Young people can do very little to affect the environment

2. Every individual has a role to play and can make a difference.

(ここでは、2 が Jane Goodall の主張)

3 本来であれば㊤の穴埋めサマリーに進むのであるが、上述のように、それでは従来のサマリー活動と変わらないため、その活動の代わりに、以下のような指定をした：

Write a summary of Jane Goodall's life

*Motivation to live with animals in Africa and write about them

*Her experiences in observing chimpanzees: their characteristics, way of life etc

*Her life as an activist, her messages to people all over the world

*Her Roots & Shoots program for young people, her final message

以上の4つの柱と上の A、B などをヒントに、自分の言葉で英文サマリーを書いてみよう。

(おうちの人や他校の友人に「こんな内容の話をやったんだ」と伝えるつもりで、と補足)

また、書く前に、授業の一番初めに見せた、Jane Goodall: Mini Bio を通して視聴し、視覚的・音声的にもう1度全体の流れを確認した。(与えた時間は20分から25分程度)

4.3 生徒のサマリーの傾向・特徴

実際に生徒に書かせたサマリーの全体的な傾向はどうであったかという点、全体のおよそ3分の1は、筆者が指定した質問に沿ってまとめたものであった(例1)。一方、3分の1弱は、前半の内容が詳しく、ややバランスを欠いたものであった(例2)。残り3分の1強は、授業で補った情報も含めた、バランスの取れたものであった(例3)。

4.3.1 例1 質問項目に沿ってまとめたもの

Jane Goodall is a researcher of chimpanzees. She first decided to go to Africa when she was 11 because of the Doctor Dolittle and Tarzan books.

From her experience in observing chimpanzees, she knew their characters are friendly, loving and sometimes cruel.

She told people all over the world we humans are in danger of destroying our environment and ourselves along with it.

She told young people small changes make a big difference as his final message.

非常に簡潔で、本文の各 Part の内容をカバーしている。教科書のサマリーなどで載っているものは、この形に近い。

4.3.2 例2 前半の内容に焦点が偏っているもの

①She (=Jane Goodall) was born in London. She was interested in animals even in her childhood. For example, she watched how hens lay eggs until she was looked for by police. Then, she was motivated to live with animals by a series of books "Dr. Dolittle."

She was invited to her friend's house in Kenya. It was first time for her to go to Africa. She earned enough money to go there by herself. There she met a famed anthropologist Louis Leakey. He set her up to study chimpanzees in Tanzania. She found many facts about chimpanzees no one had known.

When she held a discussion with other researchers, she decided to become an activist. She established some projects such as Roots & Shoots. She was also elected as a messenger of peace by United Nations. She told every person can make a big difference.

②Jane Goodall is a researcher of chimpanzees and also an activist for the environment. She was interested at (in) animals since childhood. One day, she was waiting long time to see how hens laid eggs. She wanted to go to Africa to research chimpanzees. But her family had (not had) enough money.

Her mother told her to work hard to reach (her) goal. So she worked her way to earn money and could research chimpanzees.

She found out that chimpanzees use tools to live. Before this discovery, people believed other creatures couldn't have intelligence.

She decided to be an activist to change many people's think (thought). (1-2, T)

カバーすべきポイントは質問項目で指示したつもりであるが、やはり前半のほうをより詳しく書いてしまった例が一定数見られた。時間の制約により、最初のほうを書いているうちに時間が亡くなった、という事情もあるだろう。

4.3.5 例3 授業で補った情報も含めて、バランスの取れたもの

①Jane Goodall has been interested in nature since childhood, but one stuffed animal of chimp led her to live with animals at Africa.

At the age of 26, she went to Gombe Stream Chimpanzee Reserve in Tanzania with her mother to study chimpanzees. There she observed that chimps use tools as well as humans do. This is so surprising that some scientists discredit(ed) her observations. Also she found out that chimps are usually friendly, but can be cruel, just like humans.

In 1986, she was shocked because she found out that chimpanzee habitats were being destroyed and the number of them was declining. So, she became an activist and told people that we may be in the danger of destroying our environment and ourselves along with it.

In 1991, she started a movement called Roots & Shoots. This title implies that young people (=Roots and Shoots) can solve problem (=break the rocks and walls). She wanted to tell that each individual's change makes a big difference.

②Jane Goodall is a famous scientist and activist

who works on chimpanzees and environmental conservation.

She has been interested in nature since childhood and some books like "Dr. Dolittle" gave her motivation to live with animals in Africa and write about them.

She found many similarities between humans and chimps, which surprised people. However, after she knew that the chimpanzee habitat was being destroyed, she decided to be an activist, to tell the world the danger of destroying nature. She also created a program called Roots & Shoots for young people.

She believes that people should think about the consequences of the little choices and how those little changes are important to make this world a better place. (1-3, T)

これらは、各パートの要点が述べられているだけでなく、授業で補った Part2 と Part3 間のギャップなどにも触れられており、全体の流れが自然なものになっている。この場合は、授業で動画を見せたことが報われた思いがする。

4.4 優れたサマリーに見られる特徴

1 ある事象を、別の表現によって簡潔に言い換えている

・ She has liked animals since childhood. After she read the story of Dr. Dolittle, she wanted to go to Africa to see animals. The dream came true, because she was invited to Kenya by a friend of hers. There she met a famous anthropologist and she started observing chimpanzees. (そこまでのお金を稼いだなどの経緯は言わずに The dream came true でひとまとめにしている)

・ Jane Goodall was interested in animals since her childhood. One day, the turning point came. She had the opportunity to go to Africa. And she took advantage of it.

In Africa, she observed chimpanzees carefully. She found chimpanzees and humans are so alike in view of DNA, emotions, character, and behavior.

(具体的な経緯は出さず、opportunity, take advantageなどで要約したり、“friendly, cruel”などの形容詞を用いず、in view of... でまとめている。)

・ After organizing a conference with other

scientists, she realized the environmental crisis the chimpanzees are facing. She believes that humans can change the world through sharing knowledge about the environment. (“chimpanzees’ habitat was being destroyed and the number was declining” という具体的表現をやや抽象度の高い表現に置き換えている。)

2 談話標識 (discourse marker) を効果的に用いて、意味のつながりをスムーズにしている。

・ Her observation allowed her to find so many interesting chimps behavior, such as using tools. In addition, through the observation, she found chimpanzee habitats being destroyed, because of human beings’ activity. Then, she started acting as an activist.

She argues that all wild animals have the right to live, and we have to save them because everything in nature is interconnected.

Furthermore, she believes that young people can affect the environment because small changes can cause a big difference. (接続表現で、意味関係の流れを明確にしている。’because’ の多用は少し気になるが)

・ She worked on a research on chimpanzees and found out that chimpanzees also use tools like humans.

Meanwhile, the number of chimpanzees was declining and they were endangered. So she became an activist and worked on a lot of projects, such as Roots & Shoots.

(’meanwhile’ の使用によって、研究調査している間に、ということが明確になっている。’such as’ によって、具体例を引き出している。)

・ After discovering the fact that chimpanzees’ habitats are being destroyed, she became an activist and told the world to stop the destruction. On top of that, she started Roots & Shoots to spread awareness of environmental crisis to young people. (’on top of that’ によって、彼女の活動の中で、Roots & Shoots がとりわけ重要であることを示している)

3 分詞構文などで、簡潔な表現にしている

・ She was fond of observing animals. Gradually, she became interested in going to Africa and living

with animals there, and writing books about them. Her friends laughed at her dream. But she didn’t stop trying to make it come true, supported by her mother. (母親の励ましを、具体例でなく分詞構文で簡潔に表している)

・ Discussing difference of chimp behavior, she (was) shocked to find chimp habitats were being destroyed. Then, she became an activist to change the situations. (Discussing によって簡潔にしている。また、後半の Then, はつなぎ表現、’change the situation’ は簡潔な言い換え表現になっている)

・ Jane started working as an activist, persuading people to protect animals and the ecosystem they live in. Placing her hope on young people, she created the Roots & Shoots program, which comprises of three projects, aiming to help people, animals and the environments. (分詞構文が効果的に用いられている。’comprises of’ は of 不要)

4.5 サマリーの問題点とその対策、工夫

今回、背景知識や話の流れから少しギャップがある部分など補いながら、より深い理解を目指して授業を組み立ててきた。そのおかげで、サマリーにもそれが反映された例が多く見られたのは良い成果であった。しかし、一方で、いろいろと背景知識を盛り込んだために、その部分の印象、特に初めの部分の印象が強くなり、前半部の要約に偏りがちな例も相当数見受けられた。これは、上述の *Swales et al.* 中の1で “There is a tendency to devote more coverage to the earlier parts of the source text.” と述べられている通りの結果になってしまったといえる。これを避けるために、カバーすべきポイントを事前に提示したのであるが、それでも、強く印象に残った部分を書くのはどうしても人の常である。

1 問題点への対策、工夫-1

もう少し、タイトルを意識させるという方法はあったかもしれない。つまり、本課のタイトルは Roots & Shoots であるから、より後半の Jane Goodall さんの環境保護活動や人々へのメッセージに焦点を置くべきであったかもしれない。

2 問題点への対策、工夫-2

また、よりよいサマリーを書かせるためにはよい例をたくさん出して、表現方法にも意識を向けさせる、ということがあるであろう。今回提示した、優れたサマリーに見られた言い換え表現や、つなぎ表現、分詞

構文など、特に分詞構文や非制限的な、which などは単なる文法の知識、接続詞を用いた文を分詞構文で言い換えるという機械的な練習だけでなく、もっと広い意味でサマリーを書く際などに効果的に用いることができるのだという意識づけが大切である。

3 問題点への対策、工夫-3

言い換え表現は具体的にあるルールがあるわけではなく、指導はより難しいが、日頃の oral introduction などで、新出語を平易な表現で言い換えたり、本文に出てこない表現を意識して使用してみたりすることで、徐々に意識が高まるものであろう。例えば、今回のサマリーで “While staying in Tanzania, she found they(=chimpanzees) are not herbivores but omnivorous” と書いた生徒がいた。この herbivore (草食), omnivorous (雑食) というのは、Part 3 の後半で “Everything in nature is connected. Plants and animals make up a whole pattern of life.” という文があるが、「この a whole pattern of life を別の言葉で言えばなんだろうね」と問いかけて「生態系」と出た際に eco system に触れ、primary consumer (一次消費者) なども紹介したときに出した表現である。また筆者は新出語の意味も基本的には英英辞典の平易な定義で紹介することになっている。日頃からの、こうした取り組みが、サマリーを書かせる際にも役立つであろう。

5 おわりに

本稿は、「はじめに」でも述べたとおり、英語 COMI の教科書の大半を占めている「穴埋めタイプサマリー」から、生徒が自力でサマリー・ライティングを行えるよう指導していく試みである。そのためには、単にサマリーを書く段階からの指導ではなくて、本文導入のところから始めなければならない。教科書本文は様々な制約から、談話構造的に見て、すっきりとした流れになっていない場合があり、そういうものを補って初めて、納得のいく本文理解をすることが出来る。

サマリーでは、本文の字句どおりの表現を避けて自分の言葉で表現することが求められる。そのためには、Oral Introduction [Interaction] の段階から、平易な表現に言い換えたり、学習者を様々な表現へと意識付けさせることも必要である。

【参考文献】

馬場千秋 (2022) 「英語コミュニケーション I」のまよめの活動を談話文法の視点から考える (2022 語研大会資料集・記録集 P110, 111)

八宮孝夫 (2022) 「英語コミュニケーション I」のまよめの活動を談話文法の視点から考える (2022 語研大会資料集・記録集 P112~P118 および当日の Google Slides)

Swales, John M. & Feak, Christine (2004) *Academic Writing for Graduate Students, Second Edition: Essential Tasks and Skills* (University of Michigan Press)

高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)(文部科学省)

使用教科書

Crown English Communication I(三省堂)

Lesson 5 Roots & Shoots

付記 Summary as an English teacher at Komaba

今回の授業実践と直接関係ないのであるが、本校での 30 年間の授業経験のいわば「サマリー」として、以下の拙論を述べる。

1 授業は生徒との信頼関係で成り立つ共同作業である。

筆者は決して教え方が上手いほうではない。しかし、教材は信頼に足るべきものと考え、面白く役に立つものを用意しようと努め、また、その背景知識を含め事前準備を出来る限りするように心がけた（教師として当然のことであるが）。その一手段として、1つの教材を扱う場合に、それに関する英語の本を1冊は読むようにした。それが無い場合には you-tube などで、関連動画などで、教材の持つイメージ、実感を伴った理解をさせることに重点を置いてきた。

2 まず、Oral Introduction をしっかりと行うこと。

最近では 4 技能 5 領域といって、ことに speaking は「やり取り」と「発表」に分かれるなど、Output により重点が置かれている印象を受ける。しかし、そのベースとなるのはしっかりとした Input であるから、ある意味のまとまり (chunk) としてとらえさせ、その聴覚像(acoustic image)を導入の段階で捉えさせた。理解の助けとなる、わかりやすい板書計画を練り、一旦理解させたなら、その理解を伴った音読練習(chorus reading)をしたい。苦手な生徒の音読は 1 語単位で覚束ないが、理解が進むと捉える単語の範囲 (eye span) も広がり、読みもなめらかで自然なものになってくる。もちろん、Input の成果として Output につなげることは大切で、中学初級段階で短めの dialogue や oral reproduction、中級段階で少し複雑な presentation など行い、英語を音声化して発表することの楽しさを体験させたい。

3 英語力の基礎は読むことによって磨かれる。

英語教師として英語力を伸ばすことは常に念頭に置くべきで、その最も簡単な方法は英語を読むことである（人によっては英語を聞く、(英語で) 映画など見るという方法もある）。筆者は遅読であるので、非常に低い目標で恥ずかしいが、月に 1～2 冊は英語の原書を読むことを心がけてきた。しかし、これだけであっても 30 年続ければ 300～400 冊は読むことになり、これが全ての基礎になり、英文の持つリズム、呼吸がわかってくる。筆者は英語を書くことに苦手意識があっ

た（今もあるが）。しかし、ある時期から、英文を読むときのリズムに乗せて英文を書けば、それほど違和感のある英語を書かないようになることに気がついた。それに基づいて Oral Introduction のスクリプトを書き、前時の本文の summary を書くようになり、授業の頭に blank summary として Review として活用するようになった。英語は、英語教師にとって永遠に完璧になることはない「外国語」である。常に現役の学習者でいたい。

4 生徒に課題を与えたなら、自分にはその数倍を。

長期休暇には リトールドものなど、リーディング課題を課すことが多い。その場合に、3 つも関連するが、自分自身にはその数倍の量の課題を課すことにしてきた。例えば、*The Adventure of Tom Sawyer* のリトールドを生徒に課したら、筆者自身はその原書を読むわけである。*Romeo and Juliet* であれば、シェイクスピアの原文で読むのである。後者の場合は英語も韻文であり多少古めで、なかなか手ごわいが、それによって自分の英語力も伸び、また授業で扱う際にも深みや厚みが格段に違ってくる（実際に生徒にも有名なシーンは原文で扱う）。時間の関係で、授業で扱える分量は限られてくる。全体のほんの一部分であることも多い。しかし教える教師のほうは原文の全体像で磐石に支えられているという状態にしておけば、生徒からの意外な質問にも落ち着いて答えられる場合が多い。

5 生徒の持っている知識、雑学など最大限に活かす。

4 とは一見矛盾するかもしれないが、どれほど準備しても、1 クラス 40 人あまりの生徒のもつ知識の総体には到底かなうものではない。そこで生徒のもつ知識を最大限活かすことも大切である。日ごろの授業のやり取りの中でも、こちらの気づかない意見・視点が出ることは良くあることである。まさに授業が生徒との「共同作業」である所以である。また、長期休暇の課題ではリトールドものは「規定演技」として課し、もう一つ「自由演技」と称して、生徒の興味のある英文記事や短編、旅行先の英文パンフレットなどに英文コメントを付したものを提出させるようにしてきた。この中で興味深いものは授業で取り上げる。ノーベル平和賞も受賞したマララ・ユスフザイについて、筆者はほとんど知らなかったのであるが、夏の課題でこの少女のスピーチを取り上げた生徒が 2 人おり、筆者も興味深く感じ、次の学期の授業で、そのスピーチとともに扱ったことがある。ノーベル平和賞受賞の 1 年以上

も前のことであった。生徒のアンテナは高い。是非積極的に活用したい。

6 英語以外の外国語を学んでみる。

それぞれの英語教師には、自分のベースとしている *teaching theory / principle / method* があると思われる。その理論なりやり方を、自分が他の外国語を学ぶことによって応用してみるののである（いわば、人体実験）。

筆者の場合は音声で導入する、音読を重視する、ということを中心としているので、これに基づいて 20 年前から NHK ラジオの語学講座に複数挑戦した。ラジオであるから必然的に音声中心の学習になる。最初は何の知識もなかったロシア語。少したって大学で少しかじったスペイン語、フランス語、ドイツ語を。その後イタリア語、中国語、ハングル（韓国語）と広げ、今でも毎日聞いている。各講座は半年で 1 つのクールが終了するので複数回繰り返すと、文法の外郭がわかってくる。テキストを見て文字もわかってきたら、後はテキストを見ずにひたすら聞いて、それを繰り返したり、文を復元して書いてみたりする。聞いているうちには、最初は区別できなかった類似の音が徐々に区別できるようになってくる。アラビア語も挑戦したが、こちらは週に 1 回しか放送がないのでなかなか記憶に定着しない。やはり、語学は頻繁にやるのが大切だとわかってくる。

多言語を学ぶのはメリットしかない。学習者の立場に立ってどんな点につまづくかが追体験できる。また、それぞれの講師によってやり方も異なるので、どんなやり方がやり易いかも比較できる。英語はドイツ語と同じゲルマン系で、語彙的にはラテン語・フランス語などの影響を受けており、これらの言語に通じてくると英語をより広い視野で捉えなおすことができる。また英語は語順（文型）がきちりとした言語であるが、ロシア語は語順に対しては比較的緩やかで、好対照を成す。中国語やハングルは日本語を見直すのに役立つ。また、台湾、釜山と交流しているので、この 2 言語が片言でも出来れば、交流が 2 倍楽しくなる。是非お勧めしたい。

7 Some Recommended Materials

以前に「私家版・英語のカリキュラム」として中学から高校を通じて、どんな教材をいつ扱ったかは紹介した。その後も多少の入れ替えはしても以下の教材は、いずれも筆者が複数回扱ってきて、生徒の反応も比較

的よかったものである。それぞれの教師には持ち味や好みがあり、これらの教材は絶対的なものでないのはもちろんであるが、もし教材に迷ったならば、こういうのもあるよ、というつもりで紹介する。

中学 1 年生

The Tale of Peter Rabbit

イラストもあり、過去形の導入に便利。何よりも面白いので文章を丸ごと覚えられる。

Twenty Thousand Leagues Under the Sea (Penguin Readers Level 1) 1 学年のまとめによい（春課題など）。Disney 版の DVD もあり、視聴して理解の確認も可。

中学 2 年生

The Adventures of Tom Sawyer (Macmillan Readers, Level 2) CD 付あり。2 年の夏課題に良い（不定詞の復習）。

Disney 版 *Tom and Huck* という DVD あり。視聴して比べても良い。

Three Short Stories of Sherlock Holmes (Penguin Readers Level 2) 冬課題として中 2 英語のまとめに。

The House that Jack Built ナーサリーライムの積みあげ歌。関係代名詞 *that* が出てくるので、中 3 でも良いが、むしろ中 2 の最後にイラストを見せながら、暗誦させて形を身につけさせてしまうのがコツ。

中学 3 年生

Martin Luther King (Penguin Readers Level 3) 教科書にもあるので夏課題として扱うと良い。

The Wizard of Oz (NHK ラジオ講座『高校生からはじめる「現代英語」』2021 年 8 月号「オズの原文を読む」)

仮定法の導入によい。DVD も楽しい。

Romeo and Juliet (Macmillan Readers Level 4)

中学英語のまとめとして冬課題に。シェイクスピア劇の導入、韻文や詩の技法、有名なセリフの暗誦。

高校 1 年生

Railroad Man (*Bob Greene's Eye for America* (南雲堂) 中の一編) 黒人の差別問題として捉える生徒が圧倒的に多い。思い込みでなく、行間をしっかりと読むことを教えるのに最適。高校英語の導入として。
Beowulf (Black Cat Reading & Training Step 4 B2.1)

高校 1 年の 1 学期に。英語の歴史と関連付けて、ある程度の長さのものをリスニングさせながら速読するのに良い。You-tube にも関連アニメあり。

The Glory That Was Greece 『ギリシャ神話』(成美

堂)

夏課題として。ギリシャ神話は、今でも気づかないところで英語文化に影響を及ぼしている。授業でも数編扱う。分詞構文、関係詞の非制限用法などに習熟させる。

The Declaration of Independence (『アメリカ精神の英語』ラクーン英語読本シリーズ (筑摩書房) 中の一編)

世界史の授業と連動しても良い。日本国憲法にも影響を及ぼした歴史的な文書。高1最後のまとめとして。構文的にもチャレンジングな一編である。一部暗誦が有効。

高校2年生

Winnie the Pooh (Puffin Books) 英語の言葉遊びの傑作。Disney のアニメ版との比較もよい。CD 版も複数あり。

The Merchant of Venice (New Tales from Shakespeare 『新シェイクスピア物語』(成美堂) 中の一編)

中3の *Romeo and Juliet* に続き、シェイクスピアの戯曲を味わう。有名なセリフの暗誦など。

The Coup de Grace (『ビラス短編集』小英文叢書(研究社) 中の一編) 南北戦争が舞台の短編。緊密な構成の本格的な短編を味わう。次に挙げるリンカンの演説の背景ともなる短編。

The Gettysburg Address (『アメリカ精神の英語』ラクーン英語読本シリーズ (筑摩書房) 中の一編) リンカンの有名な演説。10文、272語の中に、リンカンのこの戦争に勝利する意味が込められている。暗誦。

高校3年生

Edwin O. Reischauer (My Life between Japan and America (HarperCollins)の一部)

日米2つの文化の中で育ち、後に駐米大使となった人物について、理解を深める。

Galileo Galilei (Chapter 5 The Scientific Revolution: The First Recognition of Revolution in Science, *Revolution in Science* (Harvard University Press))

‘Revolution’の本来の意味は何であったか、どういふ点でガリレオの研究が revolution といわれるのか、を読み取る。

I Have a Dream (『アメリカ精神の英語』ラクーン英語読本シリーズ (筑摩書房) 中の一編)

高校英語の総まとめとして、中3で扱った Martin Luther King Jr. の有名な演説の全文を扱い、その一

部を暗誦する。

以上、少々長くなったが、中高6年間でお勧めの教材である。どの教材も、明日パッと教えられるようなものではない。それ相応の準備が必要なものばかりで、何度か扱うことで教師自身の理解も深まるタイプの教材である。それこそが、これらの教材のねらいで、扱うことで生徒だけでなく教師の実力も確実に伸びうることを意図したものである。

8 おわりに

筆者は英語の授業において、「生徒に如何に実感を持って理解をさせるか」をテーマに授業を展開してきた。これは、恩師若林俊輔先生が常々説かれてきたことである。若林先生は筆者が大学4年の時に赴任され、1981年筆者が卒業後も、2002年に亡くなるまで20年以上にわたって毎月第1日曜の14:00~17:00にご自宅を開放され、卒業後英語教師になった者たちが自由に英語教育について議論する場を提供されてきた方である。基本的には最近出版された英語教育関係の書籍をレポーター担当がレポートし、それについて侃侃諤諤するというものであったが、授業を録画したものを皆で視聴して、それについて議論することもあった。その会は、じきにCOFS (Circle of First Sunday とか Circle of Foreign Studies とか、諸説あり)と呼ばれるようになり、その日の会の内容・出席者の感想・次回の予定を載せた Newsletter も発行するようになり、その Newsletter も100回、150回、200回と区切りごとにかなり大部の冊子となった。

筆者は2001年の12月の例会で、その前の月に教育研究会で撮影した授業のビデオを提供して、参加者に議論していただいた。決して満足の行く授業ではなく、若林先生のお言葉は「何やっとなるんじゃ!」だった。その例会後、何日かして先生は体調を崩され、入院され2002年の3月にはお亡くなりになった。つまり、筆者は若林先生に情けないような授業を見せたままで永遠の別れとなったのである。

あれから20年余りが経ち、筆者が若林先生から及第点をいただけるような授業が出来るようになったか、はっきり言って自信はない。ただ、30年をかけて、これが自分のスタイルだ、というものは確立した気がする。それでも明日の授業のことになれば、また一悩みする。これは、教師をしている限り続くことであろうと思う。